

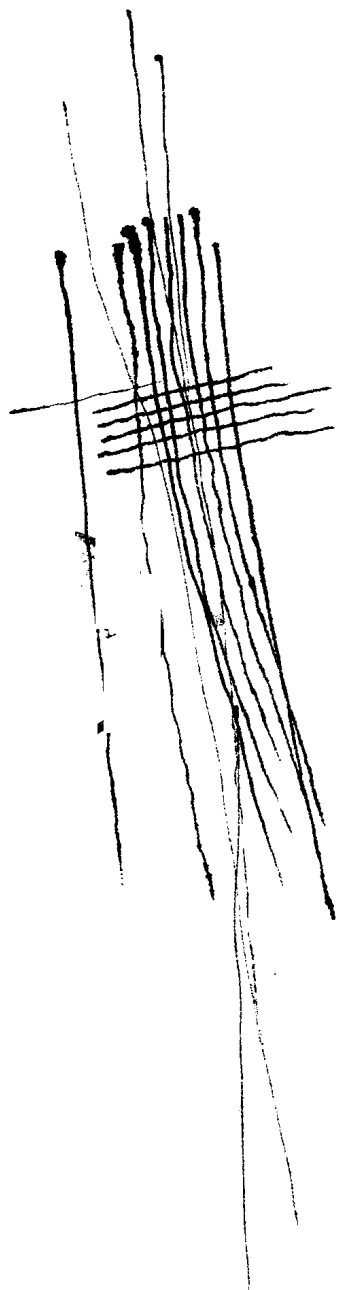
剣と花

立原正秋



剣と花

立原正秋



講談社

剣と花

〈新装版〉

昭和四十八年五月二十四日 第一刷発行
昭和五十一年一月二十六日 第七刷発行

著 者 立原正秋

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二二

郵便番号 一一二

電話東京〇三九四五―一一二(大代表)

振替東京三九三〇

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

落丁本、鼠丁本は、おとりかえいたします。

© Masaaki Tachihara 1968
Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。(文1)

劍
と
花

装帧·三田恭子

第一章

1

鎌倉山の南端、相模湾を一望のもとに見おろす一角に、
櫻ヶ原とよばれている高台がある。

鎌倉山を東西に縦断している市道を途中から左に折れ、
車一台がやっと通れるほどの雑木林の山路を南西に千メートルほど入ると、忽然と左側に視角がひらけ、海が見える。そして、右側の松、櫻、椎の樹木に囲まれた高台に、一軒の豪壮な屋敷が建っている。ここが石津屋敷であった。

十年ほど前まで、この屋敷には人の出入りが繁かったが、当主の石津武一郎が石津産業を引退してからは、にわかに客足がへりだし、いまは訪れる人として稀である。

十一月の末、櫻ヶ原では、木々の枝から黄ばんだ葉がしきりに落ち、石津屋敷は秋の陽に豊が照り映えていたが、あたりは深閑としていた。

石津屋敷には塀というものがなかった。屋敷を中心にひろがり起伏している広大な山林が石津武一郎の土地であっ

た。

いま、右手に木刀を杖がわりに握り、櫻ヶ原を散歩しているのは、今年八十歳になる石津武一郎である。結城紬に白足袋のよそおいで、短く刈りこんだ白髪、ながく白い眉毛の下には、鋭い目が光っている。長身瘦軀、まさに枯木のような風貌であるが、足腰がしっかりしていた。

かたわらにつき添っているのは、五十四歳になる田代雪子で、二十五年前、武一郎の妻の清子が亡くなって以来、武一郎の身のまわりの世話をしてきた女である。

「あれはなんじゃ？」

武一郎は不意に足をとめると、耳をすました。麓の稲村ヶ崎あたりから、ゴオウという戦車のような響きがきこえてきたのである。

「はい、なんでも、山を切り崩して、宅地をつくるとか、そんな話を耳にしましたが、ブルドーザーの音ではないでしょうか」

雪子が答えた。

「馬鹿な奴等だ。また山を崩しているのか」

武一郎はしばらくきき耳をたてていたが、馬鹿な奴等だ、ともう一度つぶやくと、しずかに歩きだした。

「なんでも、船会社が宅地造成をはじめたというような話でした」

「船会社が？　なんという船会社だ？」

「飯倉海運とか……」

「業績のよくない会社だな。海で仕事をしなければならぬ連中が、陸の上で、しかも自然を毀してまで金儲けをするなど、よほど頭の悪い人間がそろっている会社だろう」

武一郎は隻腕であつた。いまから二十七年前、つまり昭和十三年の夏、張鼓峰で日ソ軍が衝突したとき、左腕を迫撃砲弾で吹き飛ばされたのである。そのとき彼は陸軍少将であつたが、隻腕になつたのを機に退役した。彼が石津産業を興したのはこのときであつた。

彼が興した石津産業は、はたから見ると一風変つていた。彼は、戦場で片端になつた部下をあつめて社員にしたのである。発足当初、石津産業は、軍に品物を納める御用商人であつたが、終戦をさかいに、武一郎の長男である信一郎が、貿易商に切りかえた。

「山を切り崩すとなると、一年はかかるでしょうね。うるさい音がここまで響いてこないといひんです」

雪子が言つた。

「なに、戦場のことを思えば、たいした音ではない。わしは、さっき、あのブルドーザーの音を、戦車の音かと思つた」

武一郎は再び足をとめると、麓からきこえてくる音に耳をすまし、一瞬、過去をふりかえる遠い目を見せた。軍靴の響き、疾走する軍馬の蹄の音、炸裂する砲弾の閃光……

そこには、彼の過去の栄光と悲慘のすべてが凝集してゐた。商人としての彼のちからは、やはり或る程度は軍人としての過去の栄光によるものであつた。彼に商才があつたわけではない。彼は勇氣ある男であつた。彼の栄光はすべてこの勇氣の賜物であり、悲慘もまた勇氣の所産であつた。

「戻ろうか」

武一郎はふと現実に還ると、ゆっくりきびすを返した。歩いている彼の姿は、左腕の袖が動かない。着物をきていると腕が無いというのがすぐはわからない。ちよつと懷手をしているように見える。

2

石津屋敷の広い居間には、終日煖炉に薪が燃えている。煖炉のかたわらには黒い皮ばりのどっしりした椅子が置いてあり、武一郎は起きているときはたいがいこの椅子に掛けて日を過ごしていた。

そして彼の掛けてゐる椅子の背後には彼の過去の栄光を物語るいくつかの品物が並べてある。まず、壁にかかつてゐる油絵の肖像画は、彼が陸軍少将時代のもので、胸にはいくつかの勲章がさがつてゐる。壁を削りぬいてこしらえた棚には、鎧と冑がおいてある。これは戦国時代の武将で

あった先祖の遺品であった。そのかたわらに立てかけてある大小二本の刀も先祖の遺品であるが、いずれも、剣道七段の彼に相応しい品であった。

このほか、前に突きだして造った棚には、軍人としての彼を物語るさまざまな品が並べてあった。

薄暗い室内に、それらの品は、まるで亡霊のように武一郎の背後に控えていた。

武一郎には六人の子がある。長男の信一郎が五十歳で石津産業の社長、長女の美枝子はある貿易商に嫁したが、三人の子をのこして去年四十三歳で病没、次男の幹次郎は三十五歳になり、これは科学者で、現在、ある大学の理学部の助教を務めており、次女の勢伊子は三十二歳で映画女優、そして三男の文三郎は三十歳になり、これは遊んで暮らしている。もう一人の子、二十四歳になる千代子は、田代雪子とのあいだに出来た娘だが、これは母娘とも武一郎の籍に入っておらず、千代子は武一郎が認知した子になっていた。

この六人の子のうち、現在、石津屋敷に居るのは、次男の幹次郎と千代子だけである。ほかはみんな、息ぐるしいと言って家を出て一戸をかまえていた。

きょうだいが息苦しいと言っているのは、父親の過去の栄光のことであった。事実、きょうだいの中で、父親を超える勇気ある者は一人も出ていなかった。

武一郎は、下男の老爺が煖炉に薪をくべているのを眺めながら、ろくな子がいなと思う。長男は平凡な男であった。すでに三人の子があり、東京の田園調布に家をかまえていた。病没した長女も平凡な女であった。次男は、科学者らしく冷静な男であったが、陰気な性格で、三十五歳の今日まで独身だというのも、考えてみればおかしかった。女優になった次女は、きくところによると、すでに数度も男をかえており、いずれはスキャンダルに埋もれて世を終えるような女であった。もし自分の勇気をすこしでも享けた子がいるとすれば、それは末子の文三郎であった。剣道三段の腕前で、弓と乗馬をやっていたが、いけないのは、鎌倉駅前でバーを経営している年上の女と同棲していることだった。大学では農学部を籍をおいていたが、なんのために農学をまなんだのか判らなかつた。

そして現在、武一郎の寵愛を一身に受けているのは、田代雪子がうんだ千代子であった。

しかし、ろくな子がいな、と武一郎は思う。ものになりそうなのは文三郎だけであった。自分の若い頃に似て喧嘩早く、義理人情と政治的な人間関係のつながりを唾棄している性格も自分によく似ていたが、しかし三十にしてまだ飄々としているようでは、先が判らなかつた。

「急に寒くなりましたなあ」

老爺が薪をくべながら言った。

「細君は元気か」

「はい、おかげさまで……」

「しかし、おまえも元気だな」

「閣下より二十も若いわけですが、閣下の方が元気でございますよ」

「わしより二十も若いおまえが、そんな弱音をはくのはおかしいぞ」

「まったくでございます」

老爺は石津屋敷の西側に一戸を構えていた。子はなく、働きものの細君は彼より四つ若く、この夫婦者は、石津屋敷ではなくてはならない人物だった。一年間風呂と煖炉に燃す薪の伐りだし、野菜畑の手入をこの夫婦がやっていた。名を三芳勘七といい、武一郎が退役のとき、従卒だったのを連れてきたのである。

やがて薪をくべ終えた老爺が居間から出て行き、入れかわりに雪子が入ってきた。

「どうしてもあなたに会いたいと言っている男が、三人きっているんです」

と雪子は言った。

「わしに会いたい男が三人？ 何者だ？」

雪子はちょっとためらっていたが、前夜、駅前のバーで文三郎が三人の愚連隊を木刀で殴り倒して怪我をさせ、現在、文三郎は警察署の留置場に入っており、三人の愚連隊

はいずれも外科病院で手当を受けている、と語った。

「またやったのか」

武一郎は驚いた様子も見せなかった。

「今朝方、刑事が二人見えました。なんでも愚連隊の方が最初にヒ首で文三郎さんに切りつけたとかで、悪いのは文三郎さんではないらしいんです。あなたに心配をかけては、と思い、だまっていました」

「文三郎に殴られた三人が来たのか」

「いいえ。三人はいずれも十日から一カ月の重傷で、病院から出てこれません。兄弟分だという男達です。追いかえそうとしたのですが、どうしてもあなたに会わせろ、とすごむもので。人相がよくありません」

「会おう。ここに連れてこい」

「はい。人相がよくありませんから、お氣をつけてください」

雪子は出て行った。そして間もなく、三人の男を従えて入ってきた。

3

三人の男はいずれも三十歳前後の青年で、雪子の言う通り、いずれも人相がよくなかった。

「あなたが石津文三郎の親父かい？」

なかの一人が、燵の前のソファにどかっとなをのろしながら言った。あとの二人も、それぞれ勝手にソファに腰かけ行儀の悪い姿勢を見せた。

「おまえ達、土地の地廻りか」

武一郎は最初の男に訊いた。

「本部はお江戸にある正義党よ」

「正義党、なるほど、暴力団だな。暴力団が正義党を名乗るのはおかしいじゃないか」

「うるさいッ！ 馬鹿者ども。人の家に入ってきて挨拶もせず、それにその姿勢はなんだ」

武一郎は一喝した。

「俺達にお説教する気かよ。俺達の舎弟達がおまえの息子に殴られていま入院しているんだ。その話で来たんだ」

「話は警察でやれ。だいいち、わしは、おまえらのような礼儀知らずで頭の悪い奴等とは話しあえん」

「爺さんよ、本気でそんなこと言ってるのかい」

男がちょっとすごんで見せた。

「婦れ、野良犬ども！」

「なんだと、野良犬だと！ 年をとっていると思ひ、こっちはおとなしく出ているんだ。話しあいに応じないというのは本気で言っているのか。もう一度返事をもらおうじゃ

ないか」

「話は警察でやれと言ったはずだ」

「そうかい。爺さん、お宅に可愛い娘がいたな。どういふことになるかな」

「いまなんと言った。もう一度言ってみろ」

武一郎は右手の木刀を杖にして椅子からたちあがった。

「兄貴、気をつけろよ。この爺いも木刀を握っているぞ」

別の男が言った。

「冗談じゃない。こんな爺いになにが出来るか。おい、爺さん、もう一度言ってみろ。お宅に可愛い娘がいるね。その娘がどういふことになるか、と言ってるんだ」

「雪子、警察を呼べ」

武一郎は背後に立っている雪子に命じた。

「警察？ よしてくれ。俺達は話しあいに来たんだ」

「兄貴、かまわないから、その爺いに一発かませろよ」

「動くなッ、警官が来るまで、おまえ達そこを一步も動くな。動けば木刀が飛ぶぞ」

武一郎は三人の前に立ち、木刀を正眼にかまえた。

「兄貴、この爺い、片腕だ。早えとこ一発かましてずらからう」

ともう一人の男がソファからたちあがろうとしたとき、武一郎の木刀がその男の左肩に打ちおろされ、男はへなへたと坐りこんだ。

「動くなと言ったはずだ。雪子、電話をしたか」

「はい、いたしました」

「では勘七を呼べ」

このとき、雪子のうしろから、閣下、ここにおります、と言いながら、木刀を握った勘七が進みでた。

「よし。こいつらを見張っておれ。わしは煙草を喫むから」

「はい、閣下、承知しました」

勘七は男達の背後にまわると、木刀を上段にかまえ、裂帛の気合とともに木刀を左にいる男の頭上に打ちおろした。しかし木刀は頭上一寸のところとまった。勘七は三人の男を次々にこのようにして威圧した。

「その男はわしの剣の高弟だ。動けば首がとぶと思え」

武一郎は椅子に戻ると膝掛けをかけ、サイドテーブルからパイプをとりあげ、煙草をつめた。

「爺さん、こんなことをしたら、後でどうなるかくらいい知ってるだろうな」

と最初の男が言った。

「どうなるね」

武一郎はパイプに火をつけながらわらっていた。

「正義党の本部には剣道五段の兄貴が数人いるんだ」

「わしは七段だ」

武一郎はあらためて目の前の三人の男を眺めわたすと、

いずれも頭の悪そうな奴等だな、と言った。

「兄貴、こうしてボリ公が来るのを待ってるのかよ。木刀なんてたいしたことはねえ。ずらかろう」

さっき武一郎に木刀で肩を打ち据えられた男がいきなりたちあがると、脱兎の如く入口めがけて走りだしたが、武一郎の投げた木刀で背中をしたたかに打たれ前のめりに倒れた。しかし男はひるまず木刀をつかむと、武一郎めがけて突進してきた。このとき、勘七が木刀をふりあげると、男の手から木刀を叩き落した。

「動くなと言っておいたはずだ」

武一郎は足もとにころがつてきた木刀を拾いあげると、再び杖にしながら言った。

「席に戻れ」

勘七は木刀の切っ先で男の背中を押すと、男をもとの位置に戻した。

このとき、遠くの方でサイレンのような音がした。

「兄貴、警察だ！」

とそれまでだまっていた真中の男がうろたえた目を最初の男に向けた。

しかし二人の男は観念したのか、返事をしなかった。

サイレンの音は近くなり、やがてジーブが二台庭に乗りこんできたのが窓から見えた。ジーブからは四人の制服警官がおりてきた。

そして四人の警官は雪子に案内されて入ってきた。

「なんだ、おまえら、ここになにしにきたのだ」

と恰幅のいい警官が三人を見て訊いた。

「連れて行ってくれ、文三郎がまたやったそうだな」

武一郎がその警官を見て言った。

「はい。今度は、ちょっとやり過ぎのようです。ただ、さきに刃物で切りつけてきたのがこいつらの方でして……」

「まあ、なるようにしかならんだろう」

武一郎は泰然としていた。

4

鎌倉駅前の或る路地を入ったところに、ポインセチアと看板のさがったバーがある。カウンターのほかにテーブルが五脚おいてあり、別にかわり映えもしない店だが、冬になると、鉢植えのポインセチアの花が店内を飾る。

ここが、石津文三郎と同棲している五代冬子の経営している店である。

前夜ここで喧嘩があったのは、十一時をすこしすぎた頃だった。カウンターの前にかけてビールを飲んでいた五十がらみの客が、腕をあげた拍子に自分の飲んでいたビール壺を倒してしまい、流れでたビールが、となりに掛けていた若い男の洋服の袖を濡らしたのがことの起りであった。

若い男は三人づれで、正義党と名乗る暴力団のやくざ達であった。ビール壺を倒した男は謝ったが、若い男は、洗濯代をはらってくれるだろうな、と言った。低い声だったが、すごみの利いた態度だった。壺を倒した男は、相手の態度に気づき、財布をだして千円札を一枚ぬきとり、それを相手の前に差しだした。こゝまではよかった。

「小父さん、千円で洋服が洗濯出来ると思ってるのかよ」と若い男が言った。

すると壺を倒した男は、ちょっと相手の表情をみていたが、もう一枚千円札をだした。

「小父さん、物わかりが悪いな。この服は一張羅だ。クリーニング屋にこの服をだしているあいだ、俺は裸でいなければならんのか」

「いくらだせと言うんだ!」

壺を倒した男はさすがにむっとして訊きかえした。

「洋服一着、おらさがりを買っても二万円はする。誂えとすると三万はかかるぜ」

すると壺を倒した男は、これで勘弁してもらいたい、と頭をさげた。

「小父さん、謝らなくなつていいよ。おらさがりを買う金をだしてくれりゃ、ことは済むじゃないか」

若い男は嗤^{わら}っていた。

「木田さん、その金をしまいなさい。話をして判る相手

じゃないんだ」

とそのときカウンスターの奥の方でウイスキーを飲んでいたら男が言った。石津文三郎であつた。

「おや、あんちゃん、あんたが出してくれるのかい」と若い男が文三郎を見て言った。

「みんなが静かに飲んでゐる店だ。出て行ってもらいたい。いくら飲んだか知らんが、俺が払つておいてやろう」

「なんだと、この野郎！」

「喧嘩なら表にでた方がいいよだな」

すると三人づれは顔を見あわせていたが、待つてゐるぜ、と一人が言ひのこし、つれだつて店を出て行つた。

よしなさい、と冬子がとめたが、文三郎はバーテンから木刀を受けとると裏口から出て行つた。

四人は路地を出て暗い道にでた。若宮大路と商店街の小町通りにぬけてゐる幅三メートルの道であつた。

「ここでもいいか」

と文三郎が言つた。

「あんちゃん、そんな棒を持つてゐるが、俺達とほんとにやるつもりかよ」

と洋服を濡らされた男が言つた。

「さっきの客がだした二千円、俺がだしてやろう。それで引きあげるか、それともやるかだ」

文三郎は右手に木刀を握り、切っ先を地面に向けてい

た。

すると三人づれはだまつて三方に散り、一人が腹に手をやつたと思つたら、手に刃物が光つた。九寸五分だ、と文三郎は扉に軀をよせ、左右の二人を見た。二人も匕首を握つていた。もし三人が剣道の出来る相手であつたら、九寸五分の匕首でも相手が三人では文三郎が勝てる見込はなかつた。彼が木刀を握つて出たのは、相手がやくざだからであつた。二十歳のとき、やくざ相手に素手で喧嘩をして死にかけたことが一度あつた。相手は必ず刃物をのんでゐた。やくざ相手に三度目の喧嘩をし、木刀で相手の左腕の骨を折つたのは二十二歳のときで、そのとき彼は剣道三段の免許をとり消されてしまつた。免許をとり消されて彼はいかへつて剣につよくなつた。父武一郎を相手に櫻ヶ原で壮絶な練習にはげんだのが二十三、四歳の頃であつた。道具をつけ、運動靴をはき、竹刀のかわりに木刀を握つた。道場剣道は役に立たんというのが武一郎の教えであつた。

5

あのときと同じだ、といま文三郎は櫻ヶ原で父とむかいあつた二十三歳の夏を想ひかえてゐた。そのとき武一郎は、距離二メートルとはなれてゐない二本の木の下に息子を立たせ、自分は正面に木刀を構えて立つた。

「その二本の木が左右の敵だ。いずれも真剣を握っている。正面と左右、どれから先に斬る。おまえの背後は堀で、背中と堀との距離は五十センチしかない」

とそのとき父は言った。

しかしいまなら三人のうちどれからでも斬れる。彼は、やくざと喧嘩をしてきた経験から、相手の匕首の使いかたを熟知していた。彼等は体あたりで匕首を突きたててくるのであった。九寸五分を柄まで突きたてやすい場所は腹であった。正面から体あたりしてくる相手はある程度は防げても、横から横腹を突いてくる相手はまず防げない。九寸五分の刃渡りが腹に通ったら助かる見込はない。

「悪いことは言わない。匕首をおさめて引きあげろ。さもないと、俺はおまえ達の腕と肋骨を折るかも知れない」

しかし三人はだまってじりじり近づいてきた。

距離をせめられては木刀が振れない。木刀は相変らず右手にさげたままだ。右の相手は木刀を目前にしてすぐは刺してこない。文三郎はさつと右手をあげると正面の相手の目の前を木刀を素通りさせ、両手で木刀を握ると、体あたりしてきた左の相手の右肩に打ちおろした。相手は文三郎の顔をななめにのめって倒れた。肩の骨を打ち砕いたな、と思う。文三郎はこのとき何故か不意に兇暴な感情になった。逃がすな、三人とも殺してやろう。文三郎は一瞬むごい感情になると、正面の相手の左胸に木刀を入れた。

そして、逃げる最後の相手の腰を木刀で突き、よろけたところを、背後から左肩に打ちおろした。

バーテンが呼んだ警官が五人かけつけたのはこのときであった。

「石津さん、またやったのか」

と警官の一人が言った。

「しょうがない。正義党の奴等だ」

文三郎は吐き捨てるように答えた。

道路に三本の匕首がころがっており、三人の男が呻いていた。

「相当やったのか？」

「骨が砕けているはずだ。署に行くよ」

文三郎は木刀を警官に渡すと、いったんポインセチアに戻り、それから警察署に向いた。後悔はなかった。

暴力団に籍をおいている者は匕首の使いかたを仕込まれていた。映画のなかでなら知らず、体あたりで匕首を突き刺してくる相手に、実戦の経験のない剣道五段柔道五段の有段者が勝てるはずがなかった。

彼は、やくざ相手の喧嘩で一度死にかけたことから、いまでも相手がやくざだといつもむごい感情になった。こんなときの彼には容赦がなかった。

あくる朝九時頃、店のバーテンが差しいれにきたとき彼は留置場から出され、刑事部屋でめしを食べさせてもらっ

た。

「いまきいたが、ちょっとまずいことになったな」

と宮尾刑事がそばで茶をいれながら言った。文三郎の中学時代の同級生であった。

「しよがない。やらなかったら、こっちがやられるだけだ。奴等は人を殺しても、数年もたてば再び社会に出てくる。本当は殺してやりたいくらいだ」

「一人は肋骨が三本折れ、こいつは半月もすれば骨がくっついちゃうそうだが、二人はいずれも肩の骨を碎かれている。最低一ヵ月は退院できないそうだ」

「知っている。最初の奴を袈裟斬りしたとき、手応えがあった」

文三郎は箸をとめ、一瞬間を視た。斬ったときの感情に戻ったのか、目がすわっていた。こうした目を見せるときの彼がどんなむごい感情になっているのか、知っているのは五代冬子だけである。ふだんの彼は虫も殺さないような顔をしていた。

「いちおう、お父さんの方に知らせておこうか」

と宮尾刑事が言った。

「いいよ。心配させるだけだから」

「正義党が難題をふきかけて行くと困るよ。知らせるだけ知らせておこう」

「そうか……いいようにしてくれ」

文三郎は普段の目に戻ると、再び箸を動かしはじめた。

めしを食べながら、いつになったら俺は喧嘩をやめるのか、と彼は思う。前夜の事件にしても、正義党の三人とビル壘を倒した客を表に追ってしまった。それまでだった。一度死にかけた事実からくるやくざに對しての宿怨があったにしても、前夜の打ち方はすこし度が過ぎていたと思う。

「前科になるかな」

彼は食事を終えると、重箱をバーテンに渡し、宮尾刑事を見て訊いた。

「そういうことになるな」

「何日くらい入っていればいい？」

「調べがついたら夕方だしてやるよ。いっしょに飲んでいた客の証言をとらねばならんのだ」

「俺も出来たらこんな喧嘩はやめたい」

「やまらないよ。佐倉先生が言っていたじゃないか。おまえは四十歳まで喧嘩をやめないだろうって」

佐倉というのは中学時代の剣道の師であった。

「四十といったら、あと十年ある」

「なんにしても、すこし自重してくれよ」

宮尾刑事は、文三郎が煙草をのみ終ると、さあ、留置場に戻ってくれ、と言った。

五代冬子は、暮方、家で用意した重箱に詰めた弁当を、さめないようにとタクシーで警察署に届けた。

彼女は、朝と同じ刑事部屋で文三郎と面会した。

「今日はだしてもらえそうもないよ」

と文三郎は冬子を見て言った。

「もう数日はいるんだな。なにしろ相手が重傷だからな。屋間、正義党の幹部というのが二人きたよ」

宮尾刑事が言った。

「俺が奴等に仕返しされるのを恐れて出してくれないのか？」

「そうではない。正義党の幹部は示談にしたいと言っていたよ」

「それなら出してくれ」

「そういうわけにいかんだ。まあ、もう数日がまんしてくれ」

「酒がのめないのがつらい」

「いくら俺とおまえが親友でも、それだけは認めるわけにいかんだ」

宮尾刑事は同室の二人の部下に合図すると、刑事部屋を出て行った。

「およしなさいと言っても、やめるあなたではないから黙って見ていたけど、なにもあんなにまでしなくなっちゃったじゃないの」

冬子が言った。

文三郎はそれには返事をせず、だまって箸を動かしていた。

「石津さん」

とこのとき五十年輩の刑事の一人が文三郎をよんだ。

「宮尾さん、さっき、だまっていましたけど、今日の午後、正義党のチンピラが三人、鎌倉山のお宅に脅しに行き、反対に木刀で押さえられ、ここに入ってきましたよ」

と刑事は言った。

「宮尾が話していた、さっきここにきたという二人とはちがうんですか？」

「ええ、別の奴等です」

すると文三郎は、馬鹿な奴等だと吐きだすように呟いた。

冬子は、文三郎が食べ終った重箱をふろしきに包むと、警察署を出た。そして店に向いながら、入院している三人のやくざ者の治療費がどのくらいになるだろうかと考えた。

石津文三郎は、冬子の亡夫の大学時代の後輩であった。亡夫の五代友成は、生前、交際していた親友後輩のなか

で、文三郎をいちばん愛していた。

五代冬子が文三郎と同棲したのは三年前で、そのとき冬子は三十一歳、文三郎は二十七歳であった。

そしていまでは二人のあいだは抜き差しならない仲になっていた。バーをだしたのは、夫が亡くなった年の暮で、四年前であった。はじめの頃、冬子は、自分より四つも若い文三郎とこうなつては、あとで自分が苦しむだけだろう、という危惧があった。彼には、女の内面をひきつけてはなさない個所があった。冬子の危惧は別の面から現れた。彼は、店に雇った女の子に次つぎと手をつけ、冬子に何度か煮湯をのませた。

冬子が度を失いだしたのは、文三郎が、店に雇った人妻と出来たのを知ったときからである。かなりの美人で、二人の子を抱え、夫が失職中の女であった。

冬子はこのときばかりは狂態を見せてしまった。一年前のことである。

冬子と同年輩のその女は名を佐野裕江といい、ポインセチアをやめて別の店に移って行った。しかし文三郎とはいまだに続いていた。冬子は煮湯をのまれた情態でこの一年を過ごしてきていた。

店につくと、すでにバーテンが来ており、なかを掃除していた。

「逢いましたか？」

とバーテンが訊いた。

「数日とめられるらしいわ」

「宮尾さんは夕方だしてやると言っていました……」

「それがだめだつて」

「まあ、しょうがないでしょう。しかし、なんであんなにまでやる必要があったのかな。いつもと違うようでしたよ、昨夜の石津さんは」

バーテンは首をかしげていた。

「あのひと、いま、心になにか鬱積しているものがあるのよ」

冬子はだるそうな調子で答えた。

「家にいてもあんなですか？ いえ、ちからをふるうということではなく……」

「そうよ。なにをきいても返事をしなかったり」

冬子は、それから、しょうがないと思うわ、とぼつりつけ加えると、ハンドバッグから煙草をだして火をつけた。

7

宮尾刑事は、前夜ポインセチアで飲んでいた客の証言をとってまわっていた。

喧嘩の発端をつくったビール壺を倒した木田という中年の会社員は、私はなにも石津さんに殴ってくれとたのんだ